

受付番号

留学・研究計画書

氏名 篠置 理子	留学機関名 パンジャーブ大学オリエンタル・カレッジ・ウルドゥー文学科
留学先国名 パキスタン・イスラーム共和国	留学期間 西暦 2012 年 10 月 ~ 2013 年 9 月
研究テーマ 現代南アジアにおけるイスラーム復興主義の発展とウルドゥー語出版媒体の発達の関係 — マウドゥーディーの著作物における思想の形成と継承 —	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>近年、世界各地のイスラーム急進派の活動が、国家内の安定だけではなく、地域の安全保障にとっても大きな障害となっており、その実情の把握が緊急の課題となっている。彼らの思想的背景には、20世紀半ばより本格化したイスラーム復興主義の影響が大きく、イスラーム復興主義の解明は、イスラーム急進派への対応の上で、極めて重要な位置を占める。</p> <p>本研究は、現代南アジア・ムスリム社会におけるイスラーム復興主義の形成と普及について、その媒体の一つである出版物に着目し、考察するものである。具体的には、南アジアの代表的イスラーム復興主義者であるサイイド・アブル・アアラー・マウドゥーディー (1903-79) の著作や、彼が1941年に創設した南アジア最大の宗教政党、ジャマアテ・イスラミー (「イスラーム党」) 系の出版物をはじめとする、ウルドゥー語によるイスラーム復興関連出版物を対象に、個々の作品の解説と、それら出版物の全体的編成の観察の双方から、出版を通じてのイスラーム復興主義形成の動態を考察する予定である。こうした観点と方法には、次のような重要性がある。</p> <p>まず、対象地域のイスラーム復興におけるウルドゥー語出版物の重要性について触れたい。南アジア・イスラーム文化の中心で生まれ、パキスタンの国語にもなっているウルドゥー語は、近代以降の印刷・流通技術の進歩の中で、同地域のムスリム社会における主たる出版言語として文化の発展を支えてきた。同地域における出版言語としては、英語もまた重要性を有しているが、取り分け、イスラーム復興主義の具現化と拡大においては、土着性と文化的・宗教的優位性を併せ持つウルドゥー語がより中心的な役割を果たしてきた。一方で、これまでのイスラーム研究においてウルドゥー語を用いた研究成果は極めて限られており、先行研究も限られた資料のみを扱ってきた。本研究が行う出版物の収集と分析が、この課題に大きく貢献できると確信する。</p> <p>マウドゥーディーは、自ら発刊した月刊誌『クルアーンの解釈者 (Tarjumān al-Qur'ān)』に発表した900本以上ものウルドゥー語論稿を発表し、それらの論稿を単行本、論稿選集、クルアーン解釈大全など、様々な体裁に編集し出版した。またマウドゥーディーの著作の一部はアラビア語、ペルシア語、英語等に翻訳され、各地におけるイスラーム復興の思想的根拠となっている。そこからは、時代性・地域性を強く反映したマウドゥーディーの言論が、様々な媒体を通じて再発信される上で、思想として体系化され、拡大していったこと推測される。この仮説の裏付のためには、より多くの作品の精読と、それらの出版期間・規模の把握が不可欠であるが、これらの刊行物は、パキスタンのラーホールにあるイスラーム党本部の図書館等に保存されており、パキスタンの主要な図書館や出版社も同地にあるため、同地に赴いて資料収集と分析を行う必要がある。</p>	

成果報告書

記入日 2018年 1月 6日

氏名 篠置 理子	渡航先国名 パキスタン・ イスラーム共和国	所属機関 Department of Urdu Literature, Government College University, Lahore
<p>研究テーマ： 現代南アジアにおけるイスラーム復興主義の発展とウルドゥー語出版媒体の発達の関係 － マウドゥーディーの著作物における思想の形成と継承 －</p>		
<p>研究期間 : 2013年 9月 ~ 2014年 8月</p>		
<p>研究成果（概要） パキスタンにおけるウルドゥー語出版の文化に触れるとともに、 現在も続くマウドゥーディーの著作の再構成の過程の把握において有用な資料を収集できた</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>留学をさせていただいたラーホールは、約1100万人の人口を抱えるパキスタン有数の大都市である。歴史上も数々の王朝の都が置かれるなど、南アジア地域の政治・商業・文化のセンターのひとつとして発展してきた同市は、ウルドゥー語による出版システムの発達の歴史の中でも重要な位置を占めており、市内には現在も多くの出版社が存在する。また、イスラーム復興主義の興隆の文脈においても、多くの指導者が同市から輩出されており、南アジアの主要イスラーム政党のひとつであるジャマーアテ・イスラーミー（イスラーム党、以下JI）の創設者で、本研究の研究対象でもあるサイイド・アブル・アラー・マウドゥーディー（1903-1979）もまた、1941年に同市にJIを設立したほか、同党の運営する出版社より数多くの著作を刊行した。</p> <p>そのようなラーホールでの一年間の留学生活は、ウルドゥー語出版文化の様々な特質とそれらがイスラーム復興主義の発展に与えてきた影響について幅広く観察する上で、非常に貴重な機会を多く与えてくれた。また、JI出版部の刊行物を中心に様々な書籍を収集できたことは、マウドゥーディーの著作物が特にJI系出版社の出版事業の中で果たしてきたイデオロギーの形成と継承の媒体としての役割を考察する上で有用な助けとなった。留学中の2014年3月には、マウドゥーディーの執筆したテキストからなる多様な刊行物の書誌情報を一説の目録としてまとめ、京都大学大学院イスラーム地域研究センターより <i>Urdu Works of Abū al-A' lā Maudūdī: An Annotated Bibliography (NIHU Research Series of South Asia and Islam 5)</i> として出版していただくことができたが、この目録の編集の過程においても、ラーホールでの生活で得られた経験や情報が大きな助けとなった。以下に詳細を記す。</p>		

● ウルドゥー語 イスラーム復興 出版文化 拠点 環境 の把握

古くから政治・商業・文化の要所として発展してきたラーホールには、現在も多くの出版社や政党・宗教団体等の出版部が存在する。そうした場所を頻りに訪れることができたことは、留学中の生活環境で恵まれていた点のひとつであった。特に、出版業に関わる店舗や事務所が密集している通称「ウルドゥー・バーザール（「ウルドゥー語の市場」の意味）」には頻りに足を運んだが、そこに店舗を連ねる業者の分布や営業形態を実際に自分の目で観察できたことは、パキスタンの出版業界の成り立ちの全体的特質を感覚的にはあるが把握する上で大変貴重な経験となった。

ラーホール市街の構造を非常に大まかに俯瞰するならば、市内中心部をほぼ東西に横切る大型道路「マールロード」の周辺に商業地域が形成され、西側にはコロニアル建築を利用した官公庁の家屋や老舗の飲食店が軒を連ねるフードストリートなどのより伝統的かつ庶民的な街並みが、また東に行けば、大型のショッピングモールや富裕層向けの高級住宅街などのより近代的な地区が展開する。「ウルドゥー・バーザール」はマールロードの西端にほど近い地域に位置し、私が留学中に学したガヴァメント・カレッジ大学もまたその近くにキャンパスと寮を構えていた。マウドゥーディーの著作の収集を目的にバーザール内の書店を巡り歩く中で目にした市場の様子からは、パキスタンの出版業界の成り立ちについてのいくつか発見を得ることができた。

「ウルドゥー・バーザール」と呼ばれる地区の中には、数本の大小の路地が通り、出版社の事務所や書店等の入った小型のビルが犇めき合っている。その多くは出版社直営の書店や特定の出版社の書籍を中心に扱う店である。故に、特定の科目の教科書ばかりを扱う店や、特定の宗派に関わる書物を中心に扱う宗教書店など、決まった分野を扱う専門書店が多く、それぞれの規模は小さいが、専門分野ごとに同じ路地に店舗が集まる傾向があり、市場全体が、多くの専門書店からなる総合書店のようになっており、そうした市場の成り立ちからはラーホールの出版業界の裾野の広さが感じられる。また、出版社の営業形態については、書店に置かれた書籍の発行部数からも興味深い示唆が得られる。ウルドゥー語書籍の多くは一版あたり数百から千冊ほどずつ発行されるものが多く、売れ行きの良い書籍のみが版数を重ねながら期間をかけて販売部数を増やしていく傾向がある。これらの状況を見ると、書籍やそれを扱う出版社のあいだには実力主義的な淘汰の力が強く働いているはずであるように思われるが、それにも拘らず、上述したようなバーザール内の出版社や書店の分布からは、限られた分野を専門とする中小規模の事業者の層がある程度厚く保たれていることが見受けられる。あくまでも主観的感想にはなるが、そのような市場主義的競争のあまり及ばぬであろうところで活動する出版事業者の存在は、出版という営みが本来、単なる情報産業の一つの形態としてだけではなく、思想や文化の具現化や蓄積・継承の媒体としての性格を持つからこそ、その社会的存在意義を維持してきたことを改めて認識させてくれた。研究対象としたマウドゥーディーの著作物の多くの刊行元となっている JI 系出版社の出版活動もまた、そうした性格を強く示しており、その背景としてラーホールの出版業界の状況を身近に観察できたことは、留學生活の大きな収穫となった。

● マウドゥーディーの著作物、およびそのテキストをもとに編集された多様な出版物の収集

ラーホールへの留学によって得られたもうひとつの成果は、JI の運営する出版部から刊行されている出版物を中心に、マウドゥーディーの著作やそれらのテキストを素材として編集された書籍を入手し、それらの出版の過程を把握できたことである。

インド独立への機運の高まりつつあった1910年代に新聞記者として執筆活動を開始したマウドゥーディーは、その後自らが編集長を務めた雑誌『クルアーンの解釈者(Tarjūmān al-Qur' ān)』に計約900題の論稿を寄稿するなど、生涯に渡り大量のテキストを遺した。それらのマウドゥーディーのテキストは、本人の編集または監修によって49題の単行本として出版されているが、それだけでなく、マウドゥーディーやJIの支持者による彼のテキストの編集を新刊の出版は、彼の死後30年以上が経過した現在でも続けられており、小冊子や書簡集、演説記録なども含めると、私が留学中までに把握できた限りでも約300点の出版物がマウドゥーディーの名のもとに刊行されている。主要著作に関してはこれまでも日本国内のいくつかの大学図書館に所蔵されていたが、支持者による近年のマウドゥーディーのテキストの編集過程は十分に把握されておらず、それらの書籍の多くを入手できたことは、イスラーム復興運動における思想の形成や継承を読み解くことのできる資料のひとつとして非常に有益であった。そのように、マウドゥーディーのテキストをもとに支持者によって近年編集された書籍の例として、JIの運営する出版社の一つであるイダーラエ・マアーリフェ・イスラーミーより刊行されている『クルアーンの諸法則の理解』シリーズ(1-4巻[2006-2014])を紹介する。

『クルアーンの諸法則の理解(Tafhīm-e Ahkām al-Qur' ān)』シリーズ

厚手のハードカバーに金色の題字や縁取りという豪華な装丁で出版されているこの『クルアーンの諸法則の理解』シリーズは、マウドゥーディーの遺した膨大なテキストの中から、クルアーン解釈の部分を抜粋し、体系的順序に集成したものである。マウドゥーディーは生涯、定期刊行物における論稿の発表を自らの執筆活動の基盤としたため、そのテキストには、時々の情勢や社会問題など非常に広範な論題が含まれるが、それらの論題に関連するクルアーン解釈は個々の論稿の中に散在した状態にあった。或いは、彼のタフスィール(クルアーン解釈)の大全である『クルアーンの理解(Tafhīm al-Qur' ān)』においても、現代社会に通ずる様々な問題についての議論がなされているが、全てのテキストはクルアーン内の章・説の順に沿って配置されており、この場合も、そこから特定の論題に関する議論を探し出すことは非常に困難であった。『クルアーンの諸法則の理解』シリーズでは、そのように雑多ともいえる状態にあったテキストの中から選別されたクルアーン解釈の部分、つまりムスリムにとってのより普遍的な議論といえる部分が、テーマごとに分類・体系化されたかたちで提示されている。マウドゥーディーの支持者によるこうした編集作業は、定期刊行物という共時的媒体において提起された議論や主張が、より普遍的な価値を持つ書物として再生産されるとともに、マウドゥーディーのジャーナリズムがひとつの体系的なイスラーム思想として編み直されようとしてきた過程の一端を示しているといえる。

留学中の2014年3月には、マウドゥーディーの著作物について収集した書誌情報を *Urdu Works of Abū al-A'īn Maudūdī: An Annotated Bibliography (NIHU Research Series of South Asia and Islam 5)* として京都大学大学院イスラーム地域研究センターより刊行していただくことができた。この著作目録の制作過程においても、ラーホール留学で得られた文献と経験が大きな助けとなったことをここに感謝する。

留学中の生活・研究でのトピックス

● ガヴァメント・カレッジ大学ウルドゥー文学部での学生生活

先に記したラーホールの出版業界に関する観察やマウドゥーディー関連の書籍の入手に加えて、留学中に得た成果のひとつといえるのが、所属先の大学での文学講義の受講である。留学中は、ガヴァメント・カレッジ大学ラーホール校のウルドゥー文学部に所属させていただいた。留学生用の授業として特別に講義の枠を設けていただき、名作や文学批評の購読やウルドゥー語による小論文の執筆を指導していただいた。週2～3時間と時間的には留學生活の中でそれ程大きなウェイトを占めなかったものの、パキスタンにおけるウルドゥー文学研究の様式や気風に触れるとともに、南アジア・イスラームの文化的象徴のひとつとしてのウルドゥー語の地域的・宗教的特質に関して理解を深める上で、とても有益で密度の濃い時間を過ごすことができたと感じる。詩文学史の講義を担当していただいたタバッスム・カシュミーリー教授、短編小説を中心に散文文学の講義を担当していただいたハーリド・サンジラーニー教授、学生生活全般を支えてくださったハールーン・カーディル学科長（当時）をはじめ、ウルドゥー文学部の教諭や職員の方々には心から感謝している。

● 大学女子寮での暮らしと交流

また、パキスタンでの長期滞在が初めてであった私にとって、留学中に生活の拠点とした大学女子寮での暮らしも、多くの驚きに溢れた貴重な経験となった。二人のパキスタン人女子学生との相部屋生活には最初は戸惑いも多かったが、若いパキスタン人女性のライフスタイルや価値観を垣間見ることができた、面白い経験であった。寮に暮らす他の学生やそこで働く方々との交流もまた楽しく、彼らのお郷自慢や家族・親戚に起きた出来事の話、日本についての素朴な疑問や他愛無い冗談や噂話からも、パキスタンの人々の倫理観や世界観の傾向と多様性を日々感じながら生活することができた一年であった。

今後の社会貢献

留学を通じて得た経験や視点、またウルドゥー語の運用力を活かし、日本とパキスタンの人々のあいだの相互理解に貢献できればと考える。元々、本研究を志した動機には、イスラーム復興という一見復古的・反近代的と思える思潮の形成において、メディアの登場や近代化がどのように関与してきたかを明らかにしたいという好奇心があった。本研究の成果はそのような壮大な疑問に回答するまでには凡そ達していないが、留学中の研究活動や生活体験を通じて、現地で起きているいかなる現象や運動も、変化する状況に対する適応の過程の一環であり、その中でメディアが果たしている役割について省みることがとても重要であることを、改めて納得することが多かった。現在は、留学を計画した当時の意向とは異なるものの、多くの方々のご指導とご厚意のおかげで、私自身もウルドゥー語を通じて日本の情報を発信するメディア関係の職場で仕事をさせていただいている。パキスタン人をはじめとするウルドゥー語話者たちと日本のあいだの理解と友好に、今後微力ではあるが、貢献することができれば幸いである。